

「大都市と精神生活」の各トピック

(以下は、松本康訳「大都市と精神生活」より抜粋)

神経刺激の強化

都会人の個性の心理学的な基礎は、内外からの急速なたえまない刺激の変化から生まれてくる、神経刺激の強化にあります。人間というのは、いつも区別をしている生き物です。人間の精神は、ある瞬間の印象とその直前の印象との差異によって刺激を受けています。長く続く印象、たがいにほんのちょっとしか変わらない印象、規則正しい習慣的な変化をしたり規則正しい習慣的な対照を示したりする印象——こうしたすべての印象は、いわば、急速に集まってくるイメージの変化とか、ちょっと見ただけで分かるような鋭い不連続性とか、思いがけない印象の奔流とかに比べると、あまり意識されません。後者の状態は、大都市が生み出す心理的な状態です。各自が街頭を行き交い、さまざまな経済的・職業的・社会的生活がさまざまなテンポでなされている都市は、心理的生活の感覚的な基礎に関して、小さな町や田舎の生活と深い対照を示しています。大都市は、いつも区別している生き物である人間に、田舎の生活とは違った量の意識を要求します。田舎では生活のリズムと感覚的な心象は、大都会に比べてずっとゆっくりと、ずっと習慣的に、ずっと静かに流れています。

都会人の知的性格

このことと結びつけて考えれば、都会人の精神生活の知的な性格は理解できるものになります。——深く感じられた情緒的な関係にもとづく小さな町の生活とまったく逆なわけです。小さな町の生活は、精神のもっとずっと無意識の層に根ざしていて、破られることのない慣習の安定したリズムのなかで、最も確実に成長します。しかし、知性の場所は、精神の、透明な、意識的な、より上の層にあります。つまり知性は、私たちの内面的な諸力のうちで一番適応力があるのです。知性は、変化に適応し、事象の対照に適応するために、衝撃を受けたり内面的な激変をこうむったりする必要はないのです。もっと保守的な精神だったら、そうした激変を通してしか、大都市の出来事のリズムに適応できないでしょう。だから、大都会の人間は——いろんな変種があることはもちろんですが——、彼を根こぎにしかねない外的環境の驚異的な流れや分裂に対して、自分自身を守るための器官を発達させるのです。都会人は心では

なく頭で反応します。この点で、意識の増大は精神的な特権だと考えられます。こうして、大都市の生活は、都会人の意識の高まりと知性の優越の基礎となるのです。大都市の現象に対する反応は、パーソナリティの深みから遠く離れた、一番敏感でない器官に移るのです。

貨幣経済と知性

知性はこうして大都市生活の圧倒的な力に対して主観的な生活を保存するものと考えられます。知性は、いろんな方向に枝分かれして行って、数多くの分岐した現象をまとめるものなのです。大都市はつねに貨幣経済の中心でありました。大都市では経済的交換がたくさんあって、集中しているために、交換手段が重要になります。これはわずかな交易しかない小さな町ではありえなかったことです。貨幣経済と知性の優越は本来むすびついています。両方ともヒトやモノに対する即物的な態度を共有しています。そして、この態度にあっては、形式的な公正は、しばしば、無慈悲な思いやりのなさにつながっているのです。知性に染まった人間は、あらゆる純粋な個別性に無関心です。なぜなら、そうしたもののからは、論理的な操作では尽くすことのできない関係や反応が起きてしまうからです。同じように、現象の個別性は、金銭的な原理にふさわしいモノではありません。貨幣はすべてに共通のものにのみ関心をもちます。貨幣は交換価値を求め、あらゆる質や個別性を「いくら?」という問いに還元します。人間のあいだのあらゆる親密で情緒的な関係は、彼らの個性にもとづいていますが、合理的な関係のなかでは、人間はあたかも数であるかのように、それ自体無差別である要素であるかのように扱われます。客観的に計測可能な業績だけが関心の対象です。都会人は、売り手と買い手、家事使用人、そしてしばしば社会的交渉の義務を負う人びとに対してさえ、このような態度で接するのです。こうした知性の形態は、小さな社会の性質と対照的です。小さな社会では、個性がいやでも分かってしまい、必然的にもっと暖かい基調の行動、たんなる奉仕とお返しの差引勘定を超えた行動を生み出します。（以下略）

大都市の生活様式——計算可能性と時間的正確さ

生活の表面に見られるあまり重要とは思えない特性のなかにも、同じ精神的な流れが特徴的に結びついています。現代の精神はますます計算的になっています。貨幣経済がもたらした実用生活の計算上の厳密さは、自然科学の理想に対応しています。その理想とは、世界を算数の問題に換え、世界のあらゆる部分を数式を使っ

ておさえてしまうことです。貨幣経済だけが、多くの人びとの日常生活を、秤量や計算、数の決定、質的価値の量的価値への還元などで満たしてしまいました。貨幣の計算可能性によって、新たな正確さ、同じものと違うものとの決める場合の正確さ、同意と不同意の明瞭さなどが生活の要素間の関係に持ち込まれてきました。——ちょうどこの正確さは、外面的には懐中時計の普及によって影響を受けてきたのと同じようなものです。しかし、大都市生活の状態は、この特性の結果であると同時に原因でもあります。典型的な都会人の関係と出来事は、通常、多様で複雑であるので、約束やサービスをする場合に時間が厳守されなければ、構造全体が崩壊してどうしようもないカオスに陥ってしまうでしょう。とくに、分化した関心をもつ多数の人びとの集まりがあって、関係と活動を高度に複雑な有機体に統合しなければならない場合に、時間厳守は必要不可欠です。もし、ベルリンにあるすべての時計が、突然狂って、おかしい動き方をしたとしたら、たとえそれが一時間でも、都市のすべての経済活動と交流が長期にわたって破壊されてしまうでしょう。加えて、距離が離れているといったような、見かけ上たんなる外的な要因も、人を待たせたり約束を破ったりすることになり、大変な時間の無駄を引き起こすでしょう。だから、すべての活動と相互関係を安定した非人格的な時間割に厳密に組み込まなければ、大都市の生活技術は想像できないのです。(中略)

歓楽に飽きた態度——その心理的源泉

生活形式の厳密さや時間的正確さに見られるような最高度の非人格性をもつ構造に結びついているこの同じ要因が、他方では高度の人格的主観性に影響をおよぼしています。歓楽に飽きた態度ほど、大都会に無条件に保持されてきた精神的現象はおそらくないでしょう。歓楽に飽きた態度は、第一に、急速に変化しつつある、極度に圧縮された神経的刺激の結果として生まれるものです。大都会の知性も、もともとはここから出てきたものです。だから、そもそも知的に生きていない愚かな人間は、ふつう歓楽に飽きたりはしません。際限なく快楽を追い求める生活をしていると飽きてくるのです。なぜかというとそんな生活をしていると、神経は長時間、最強度の反応をかき立てられ、結局ぜんぜん反応しなくなってしまうからです。同様に、神経の変化が急速で矛盾しているために、もっと害の少ない印象でさえこのような激しい反応を強いることになり、神経があちこちでズタズタにされてしまい、神経に残っている最後の力も尽きてしまいます。それでもある人が同じ環境にずっととどまっているなら、神経は新しい力を集める余裕がなくなるのです。こうして、新しい知覚にふさわしいエネルギーでもって反応することができ

なくなるのです。ここから歓楽に飽きた態度が出てきます。事実それは、静かで変化の少ない環境にいる子どもたちと比べた場合に、大都会の子どもたちが示す態度なのです。(中略)

飽きの態度と大都市

貨幣交換の中枢である大都市では、もっと小さな場所よりもはるかに印象的に、モノの購買可能性が前面に押し出されます。これこそまさに都市が飽きの態度の見られる純粋な場所でもある理由なのです。都市ではヒトとモノが集中しているので、個人の神経系は最高度に刺激され、頂点に達します。同じ条件付けの要因が量的に強化されるだけで、この到達点は反対のものに転化し、飽きの態度という特別の調節になってあらわれてきます。この現象のなかで、神経は、刺激に対する反応を拒絶することで、大都市生活の内容と形式に適応する最後の可能性を見いだします。あるパーソナリティの自己保存は、客観的世界全体の価値を下落させることによってもたらされますが、この価値の下落は結局、自分自身のパーソナリティを掘り崩し、同じような無価値の感情にパーソナリティを突き落とすのです。

控えめな態度

この存在形式の主体は、まったく自分自身のためにこの存在形式と折り合わなければならないのですが、主体が大都市に直面して自己保存を図ろうとすれば、社会的に消極的な行動を迫られます。都会人のお互いに対するこの心的な態度は、形式的な観点からは、控えめな態度と呼んでよいのではないかと思います。小さな町では、出会う人がほとんどみんな顔見知りであり、積極的な関係を結んでいます。それと同じようにして無数の人びととのたえまない外面的な接触にいちいち内面的に反応していたら、その人の内面はバラバラになってしまい、想像できないような精神状態になってしまうでしょう。ひとつにはこうした心理学的な事実から、またひとつには都会生活の不安定な要素に直面した人間が当然もつ不信感から、われわれの示す控えめな態度は必然的なものとなります。この態度の結果、何年間も隣人の顔さえ知らなかった、などということがしばしば起こります。そして小さな町の住民の目に、われわれが冷たくて薄情な人間に映るのは、この控えめな態度のためなのです。

控えめな態度に隠されているもの——無関心と敵意

いや実際のところ、私の誤解でなければ、この外面的な控えめな態度の内的な側面は、たんなる無関心ではなくて、われわれが気づいている以上に、かすかな嫌悪の情であり、見知らぬ人だというお互いの感情であり、反感です。こうした感情は、原因は何でもよいのですが、親密な接触をしたとたんに恨みを買ったり、喧嘩になったりします。このような広範な交際生活の内的組織の全体は、永続的・一時的な共感と無関心と敵意の、極端に多様化したヒエラルヒーにもとづいています。このヒエラルヒーのなかで、無関心の領域は表面にあらわれるほど大きいものではありません。われわれの精神的活動は、依然として他者のほとんどすべての印象に対して、何か独特の感情をもって反応しています。この印象の無意識の、流動的な、変化に富んだ性格は、無関心状態を結果するように思われますが、じつはこの無関心は不自然なのです。それはちょうど無差別の相互暗示が広がると耐えられなくなるのと同じです。無関心と無差別の被暗示性という大都会の典型的な2つの危険からわれわれを守ってくれるのが敵意なのです。潜在的な敵意と実際の敵対関係の予備段階は、距離感と嫌悪の情に影響をおよぼします。これがなかったら、この生活態度はぜんぜんやっていけないのです。この生活態度の程度と混合、この生活態度の出現と消滅のリズム、この生活態度が満たされる諸形式——これらすべては、狭い意味での統合動機とともに、大都市の生活様式と不可分の全体を形成します。直接的には社会的解離に見える大都市の生活様式は、じつは、社会形成の基本形式のひとつにすぎないのです。

控えめな態度に隠されているもの——大都会の人格的自由

隠された敵意という上音をもつこの控えめな態度は、こんどは大都会のいっそう一般的な精神現象の形式あるいは覆いとしてあらわれます。つまり、大都市は他の条件のもとでは類例がないような種類と程度の人格的自由を個人にあたえます。大都市には、社会生活それ自体のたいへん発達した傾向のひとつ、近似的にはそこから普遍的な定式が発見できるよういくつかの傾向のひとつが認められます。

(以下略)

社会形成の公式——閉鎖的な社会圏（略）

社会形成の公式——社会圏の拡大と個人の個性化

この段階から社会の発達、同時にふたつの、異なった、しかし対応した方向に進みます。集団が成長するにつれて——数のうえで、空間的に、生活に占める重要性や内容などの点での成長ですが——集団の直接的な統一は弱まり、相互の関係や結合がすすんで、最初にあった他者に対する厳しい区別は緩くなります。同時に、個人は、最初の嫉妬深い境界づけをはるかに超えた自由を獲得します。個人はまた、特殊な個性をも獲得します。拡大された集団では分業がすすみ、特殊な個性に機会と必要性があたえられるからです。国家やキリスト教会、ギルドや政党その他無数の集団がこの公式にしたがって発達してきました。もちろん、それぞれの集団のもっている特殊な条件や力によって、この一般的な図式が修正されてきたことはいうまでもありませんが。

小さな町の場合（略）

古代ポリスの場合（略）

社会圏の拡大と個人の自由

というのは、つぎのような関連性には歴史的妥当性があるだけでなく、事後的妥当性もあるからです。つまり、最も広範で、最も一般的な生活内容と形式は、最も個人的な生活内容・形式と密接に関連しているということです。両者には共通の準備段階があります。すなわち、両者は狭い構成体や集団のなかに敵を見つけます。この構成体と集団を維持するために、外部にある広がりや一般性に対し、また内部にいる個人の自由な移動に対し、自らを防衛状態におくのです。封建時代がそうであったように、「自由な」人間は国法、つまり最大の社会的活動範囲における法のもとにおかれます。そして不自由民は自分の権利を封建組織のもっと狭い社会圏から引き出し、より広い社会的活動の範囲からは排斥されているのです。——だからこんにち、都会人は、小さな町の住民を取り囲んでいる度量の狭さや偏見とは対照的に、高尚で洗練された意味で「自由」です。それは、大都会の最も込み合った群集のなかにいるときくらい、大きな社会圏にみられるお互い同士の控えめな態度や無関心や知的な生活条件が個人の独立性に強い影響をおよぼすものであることを、個人に強く感じさせることはほかにはないからです。それは、身体的な近さと

空間の狭さが、精神的な距離をいっそう分かりやすくするからなのです。ある環境のもとでは、大都会の群衆のなかにいるときほどには孤独感と喪失感を感じないのは、明らかにこの自由の裏面にすぎません。というのは、他の場合と同様、この場合でも、人間の自由は情緒的生活の快適さをけっして必然的に反映するものではないからです。

大都会の拡大と個人の自由

大都会が自由の場であるのは、社会圏の拡大と人格の内的・外的な自由との普遍的・歴史的相関関係によるわけですから、たんに直接的な地域の規模と人間の数だけによるものではありません。ある都市をコスモポリタニズムの中心地に行っているのは、むしろこの目に見える広がりを超えたところにあるのです。都市の地平は、富の発展に比すべき方式で拡大します。一定の量の財産は、半ば自動的に、いっそう急速に増加します。一定の限界を超えるやいなや、市民の経済的・人的・知的関係、つまり都市の後背地に対する知的優越の領域は幾何級数的に増大します。動的拡大から得られる利得は、それと同等の拡大ではなく、新しいより大きな拡大のための一段階となります。都市から紡ぎ出される一本一本の糸から、あたかも自己増殖するかのようにさらに新しい糸が育ちます。それはちょうど、都市の内部で地代の不労利得が、たんに交通の増加によって地主に自動的にますます多くの利潤をもたらすのと同じことです。

この点で、生活の量的な側面は、直接的に質的な特性に変換されます。小さな町の生活領域は、主として、独立した自給自足的なものです。大都市にとって決定的な特徴は、内的な生活が、遠く離れた全国的あるいは国際的な領域に波を打って流れ出ていく点にあります。これに反し、ワイマールはこの事例ではありません。その意義は個人のパーソナリティに依存し、これとともに消滅したからです。ところが、大都市の真の特徴は、最も卓越した個人のパーソナリティからさえ本質的に独立していることです。このことは、独立の半面であり、個人が大都市で享受する独立に支払う代価なのです。

大都市の最も重要な特徴は、その物理的な境界を超えて機能的に広がっていることです。そしてその効力はひるがえって、大都市生活に重みと重要性和責任を与えるのです。人間は身体境界内にとどまるものでも、直接的な活動の範囲内にとどまるものでもありません。むしろある人格の範囲は、時間的・空間的に、彼らから放射する効果の総体によって構成されるのです。同様に、都市もその直接的な範囲を超えた効果の総体から成り立っています。この範囲だけが、都市の存在が表現される実際の範囲なので

す。

この事実から、このような拡大の論理的・歴史的補完物である個人の自由が、たんに移動が自由であるとか偏見や狭い俗物根性がないとかいう消極的な意味だけでは理解できないことが、明らかになります。本質的な点は、究極的にはすべての人間がもっている特殊性や比較不能性は、生活様式があつてようやく表れるものであるということです。われわれがわれわれ自身の本性の法則にしたがっていること——これは結局のところ自由ということなのですが——は、この本性の表れが、他者の本性の表れと異なる場合にのみ、明らかになり、われわれおよび他者に確信できるものとなるのです。われわれの紛れのなさだけが、われわれの生活様式が他者によって押しつけられたものではないことを証明しています。

分業の発達と専門化

都市は、なによりもまず、最高度に発達した経済的分業の中心地です。都市は、分業の発達によって、パリの14番目役という有償の職業のように、極端な現象を生みだします。14番目役というのは、住居に人に分かるように看板がかかっていて、晚餐の時刻に正装をして準備しており、晚餐会の人数が13人になりそうなときに、すぐに呼び出しに応じられるようにしている人のことです。都市は、拡大するにつれて、ますます分業のための決定的な条件を準備します。都市は、規模の大きさのゆえに、著しく多様なサービスを吸収できるような社会圏を準備します。同時に、個人が集中し、顧客をめぐる競争が激しいので、個人は、簡単に他者によって置き換えることができないような機能の専門化を余儀なくされます。

競争と専門化

決定的なことは、都市生活が、生活の糧を得るための自然との闘いを、利潤を得るための人間同士の闘いに変化させたことです。ここでは、利潤は自然からではなく、他者によって与えられるのです。専門化は、ここで明らかにした源泉から出てくるばかりではなく、もっと深い源泉からも出てきます。つまり、売り手は顧客につねに新しい独特のニーズを喚起しなければならないということです。尽きることのない収入の源泉を見つけ、容易に置き換えられないような機能を見つけるために、その人のサービスを専門化する必要があります。この過程は、公衆のニーズの分化、洗練化、豊富化をうながしますし、これは明らかに、公衆の内部にますます個人的な相違を引き起こすに違いないのです。

精神的な個性化——都市的パーソナリティ

そしてこのために、心的な態度は、固有の意味での精神的な個性化へと向かっていきますが、都市の規模が大きければ大きいほど、個性化への誘因は増すのです。この過程の基礎には一連の明白な要因があります。まず、ひとは、大都市生活の諸次元の内部で、自分自身のパーソナリティを主張する困難に出会います。価値とエネルギーの量的な増大が限界に達すると、ひとは、なんとか差異に対する敏感さを刺激して、社会圏の関心を自分のほうに引きつけようと、質的な特性に手を出します。最後に、ひとは、最も特有の傾向、つまりわざとらしさ、気まぐれ、気取りなど、大都市に特徴的な勝手気ままな傾向を採用しようという誘惑にかられます。いまや、こうした勝手気ままのもつ意味は、こうした行動の内容にあるのではなく、「違っている」という形式、変わったやり方をして目立つことでひとの関心を引きつけようというその形式にあるのです。さまざまな性格の人にとって、自分自身にわずかな自尊心とある位置を占めているという意識を残す最後のただひとつの手段は、他者を意識するという間接的なものです。同じように、見かけ上重要ではないように見えるけれども、累積的な効果がなお認められるある要因が働いています。小さな町における社会的交渉と比べた場合、都会人は人と人との接触が短く少ないことです。交際が頻繁で長いために、他者の目に自分自身のパーソナリティがはっきりとしたイメージをもって確実に映し出されるような雰囲気の中にいる個人よりも、接触の短い大都市の個人のほうが、「要を得て」いて、集中的で、特徴的に見えるようにしようという誘惑がずっと強いのです。

個性化の原因——客観的文化の優越

しかし、大都市が最も個人的な人格的存在を希求する衝動を生み出す最も深い理由は——それが正当でうまくいくかどうかは別として——、つぎのことにあるように私には思われます。近代文化の発達、言ってみれば「主観的精神」に対する「客観的精神」の優越によって特徴づけられます。つまり、法だけでなく言語にも、芸術だけでなく生産技術にも、なじみ深い環境の対象だけでなく科学にも、精神の総体が体现されているということです。個人の知的な発達は、この精神の成長に不完全にしかついていくことができず、両者の距離はどんどん離れていってしまいます。たとえば、過去百年間にモノや知識や制度や慰安のなかに体现されてきた巨大な文化を一望し、これらいっさいを同じ期間における個人の——少なくとも上流身分の——文化的進歩と比較した場合に、両者のあいだには成長のおそるべき不均衡が明

白となります。いやそれどころか、いくつかの点では、個人の文化の精神性やデリカシーや理想主義が退化していることに気がつくのです。この乖離は、本質的には分業の発達の結果です。なぜなら、分業は個人に一面的な完成を要求し、一面的な追求が最大限に発達すると、しばしば個人のパーソナリティの欠乏をもたらすからです。いずれにしても、個人は、ますます客観的な文化の成長に対処できなくなります。個人は、おそらく意識以上に実践において、またこの実践からくる曖昧な情緒的状态の総体において、とるに足らない量に還元されます。個人は、物質と力の巨大な組織のたんなる歯車にすぎなくなり、この組織は個人の手から進歩と精神性と価値をひき剥がし、それらを主観的な形式から純粹に客観的な生活形式に転換させるのです。

客観的文化の舞台としての大都市（略）

普遍的個人と個性的個人の闘争の場としての大都市（略）

以上は、Simmel, Georg, 1903, ””Die Grossstädte und das Geistesleben, ”（=2011, 松本康訳「大都市と精神生活」松本康編『近代アーバニズム』日本評論社, 1-20. からの抜粋